

里山再生活動が創り出す新たな山村コミュニケーション

山形県内陸北部の農山村、角川の里。年が明けて冬本番の時期を迎えた。角川の里は農山村ならではの仕事のありようが今も人々の暮らしに残っている。春から秋にかけては田んぼや畑などの野良仕事、秋から翌年の春にかけては里山の手入れや炭焼きなどの山仕事が行われる。だから角川の里では「山の神」と「お田の神」がいる。そして野良仕事と山仕事が入れ替わる時期、すなわち春先と冬のはじめの年2回、各々の神が相互に「化身」となって交代し里人の生業を見守るといっているのである。

というわけで今、角川の里は山仕事の時期を迎えているわけだ。角川の里山も他の東北の山村部と同様大変な難題を抱えている。山村の過疎化少子化による人手不足や後継者不足、木材や木炭の価格低迷など、実に数多くの原因によって、里山の荒廃が急速に進んでいる。この稿でも何度か触れてきたが、里山は持続的に人が手入れをし、管理することで保たれている自然だ。だから手入れがされないとすぐに荒れてしまう。だが、そもそも人が山に手入れをしていこうとする動機は、里山の仕事が暮らしや生業、産業と結び付いている。それがなければ、地元の人々はなかなか里山を手入れし管理していくことができないし、後継者も山村に暮らそうとは考えないだろう。つまり里山産業の低迷こそ、現在の里山の荒廃を招いている根本的原因の一つと考えられるのである。

そこで連携する NPO のサポートにより角川の里では里山産業の再生を目指して、国土緑化推進機構の支援を受け「生物多様性を保全する間伐材の活用と循環」をテーマにかかげて、今冬より3ヵ年で「国民参加による間伐及び間伐材の利用促進事業」に取り組んでいる。内容は、里山の間伐や枝打ちを実施し、その結果出てくる間伐材を活用して工芸品を開発したり、あずまや、ガイドデッキ、木道などを規格化してキット開発し、設置していこうというものだ。特に角川の里は近年、都市部の子ども達の体験学習やグリーンツーリズムの受け入れによって交流人口が増加傾向にあり、お土産物として工芸品の需要が高まっている。里山の再生活動によって出る間伐材が工芸品の材料として活用され、体験活動で訪れる交流者に販売することができれば、啓発活動と経済活動の療法で効果が期待できるだろう。また、これまで休耕田や棚田などを利用したビオトープや散策ルートづくりが地元農家と連携して進められる中で、各活動拠点にガイドデッキやあずまや、木道を設置することが望まれていたことから、こうしたニーズにも応えることもできる。

このような活動から感じるのは、里山の再生、特に里山産業の再生を目指すにあたって、山に直接かかわる人以外の多様な人々とのつながりやそこで見出される再発見がいかに大切であるかということだ。工芸品の開発には地元の工房の協力が欠かせない。これまで無頓着に切り出していた間伐材を、工芸品に活用できるよう注意して切り出さねばならないことに気がつかされる。同じようにガイドデッキやあずまや、木道の製作のために製材所や工務店との調整、材を入れる際の配慮に気がつく。また間伐材施設に活用していただく地元農家とのつながりや信頼関係も欠かせない。冒頭で見てきたように伝統的に農業と林

業が相互に関係し合って暮らしてきた農山村地域においてこの点は特に重要なものとなる。

里山再生とは、実は山村を舞台にして人々のコミュニケーションが再生していくことを意味するのかもしれない。だからこそ里山活動は楽しく面白いのだろう。読者の皆さんにもぜひこのような活動にかかわりを持つことを勧めたい。